

俳句雜誌

空

空

令和2年7月31日発行

第18巻3号

通巻第91号



2020・7

SORA 91号

兵庫 大西乃子

梅東風に押されて杖の一步づつ
 添ひくるるナースのかひな日脚伸ぶ
 鳥帰る天文台を低く見て
 卒業す擦り傷多きランドセル
 遠ざくら薄紅いろに煙りたる

東京 遠山のり子

薄氷に乗りて啄む雀かな
 春の泥四方に奔る森の径
 乗り換へて二輛の電車春浅し
 芝草に余る日溜り雀の子
 川波も空も眩しや猫柳

岡垣 田中とし江

車列渋滞静かに解くる火事のあと
 日脚伸ぶ艇庫に白き舟を吊り
 日の差して行手きらきら春時雨
 喉仏出たる赤鬼豆を打つ
 薦被り割れば杉の香春立ちぬ

兵庫 岩井京子

着ぶくれて居り北極へ行けるほど
 五つ色にこころも淡くひなあられ
 玄関に清き朝の香フリージア
 鳥は背に首入れうらら深ねむり
 時の疫にすべなし春の家籠り

直方 曾根富久恵

桃色の嬰の踵や初春なり
 妹の友が来てゐる雛の昼
 臆病かふてぶてしきか残る鴨
 恋の猫時折こ糸の裏返る
 落つる時風を起こさむ八重椿

北九州 横田敬子

着ぶくれて十二単の姫のごと
 実のなるまで生くるつもりや寒肥撒く
 新しきご近所さんや春灯
 針山に母の毛髪山笑ふ
 大根が抜けとばかりに首伸ばす

直方 吉田悦子

ウイルスが地球を覆ふ落椿
 旧姓で呼び止められし桃の花
 湯豆腐や本音の見ゆる左顔
 春立つや嫁入道具の裁ち鋏
 点滴の処置室の窓日脚伸ぶ

兵庫 林徹也

後の世は墨絵のやうな春の夢
 小児科のナース詰所に雛の灯
 水脈かさね湖の真中へ春の鴨
 墓石も白も城垣草青む
 磯菜摘むお国言葉の声高く

京都 天谷翔子

岬への道は一本春の蟬
春霞巫女石段を駆け上る
春なれば母の白杖鈴付けむ
ピリヤードの玉のこつんと春の宵
春泥にガラスの靴のはまりけり

東京 今井康子

春風の揺らす旗影店開き
春めぐる地球は巨大観覧車
ふらここやスカート少し遅れ揺れ
風の道見えて青葉の尾根伝ひ
珈琲に浮かぶマシユマロ春の雪

神奈川 窪みち子

冬怒濤子攫はむと沖より来
雪解けの川音聴きに買ふ切符
結露の窓ミモザの花の潤みけり
灯台の影と遊ぶや春の波
北目指すレールも春の光かな

兵庫 青木朋子

恋猫の階段くわつと踏み外す
永き日や雄猫庭を巡回す
蜥蜴出つたちまち猫に啗へらる
春日まぶし老猫の眼に浮く涙
花の雨猫の香箱座りかな

兵庫 岡村尚子

記念樹にふたりの名前あたたかし
早春の光を集め淡路島
観潮や空の奥より鳶の笛
初花や一直線に飛行雲
屋根瓦の色のさまざま涅槃西風



・第九回「空新人賞」受賞作品・

田中とし江



五重塔一層ごとに初日受く

庖丁に峯と刃のあり春の雪

菘替や松皮師の吐く竹の針

朧夜や宿の長押に槍二本

明王に異国の相も霾ぐもり

東京のホームは長し大試験

すり鉢の縁はふつくら春夕べ

麦秋や抓んでみたき空一枚

枝先へ滑り出でくる蛇の舌

葉桜や通過電車の余り風

新生児室の心音夏はじめ

みどり児も氏子となりぬ樟若葉

炎天や己も遺失物のごと

元冠の海に浮輪の色あまた

シャンデリア映すロビーの作り滝

はらからは住所が呼び名夏椿

獣医舎の柵にかけある汗のシャツ

早稲の香や肺の中まで日本人

川底を渡る轍や豊の秋

稲架組んで故山の裾の広がりぬ

故郷にゐてなほ恋し鯛雲

一人掃き二人仰げる紅葉かな

魂の落ちゆく深さ紅葉谿

真鯛や海の雫のごと干され

雲来れば影を流して山眠る

息白し神宝なべて玻璃の中

眼の青きままに星鮫干されけり

河豚料る標本のごと肝並べ

亡き父の友に鯛焼おごらるる

羽根蒲団掛くれば手足伸びにけり

空集抄——柴田佐知子抄出

訃の報せ呆然と持つ菠稜草

中田みなみ

末黒葦踏めば肋の折るる音

深川淑枝

尾の先は雲に乗りたる鯉鱖

高倉和子

闘鶏の男の顔も鶏の顔

山本則男

観音を背負ひて逃げし桃の花

吉田 稗

落椿大きな水輪ひろげけり

石橋幾代

摘草や日向を走る水の音

戸栗末廣

鯨跳び水平線を越えにけり

秋 千晴

春月や母に告げざること増えて

山内 碧

厩出し一頭つつの馬の空

永淵 恵子

引鶴や儀式のごとく啼き交はす

松田 明子

廁まだ去年の暗さの残りゐて

角野 良生

掃き寄せて発火しさうな紅椿

曾根富久恵

初燕元寇元寇の地のカフェテラス

田中とし江

紅梅やそろばん踊りは機

”

花冷や問診表に嘘少し

井上 和子

煮凝を返せば鍋底の形

古賀 真理

きんぼうげ無垢な心の短くて

荷宮 克代

本借りし子のきらきらとヒヤシンス

原 友子

初つばめ空き家の軒にいくたびも

大西 乃子

夜桜や深海めきて爆心地

坂口 晴子

一斉に紙のざわめき大試験

星加 鷹彦





梅林やとこよの雲をふむごとく

囀を聞き分けてゐる母の耳

山笑ふ定刻まもる空のバス

告ぐるべき家訓など無し根深汁

もう顔も声も忘れて花衣

見えてゐる山女の傍に糸垂らす

啓蟄や名無しに浮気封じ絵馬

釣り上げしめばるのあかく岩の上

老人の店主留守がち種物屋

花の雲よりしろたへの津軽富士

ひらがなで名前覚えし入学児

土砂降りに走る白シャツ反抗期

螺子式の戸口の鍵や春の月

えとう樹里

秋津 令

森田 明成

押田 裕見子

仲里 奈央

苑 実耶

田岡 千章

河原 敬子

三井所 美智子

林 徹也

吉田 悦子

山田 正子

横田 敬子

白木蓮や医学部献体慰霊式

葦枯れて川の蛇行のあからさま

ひもじさをわすれてひさし福は内

湖を去りゆく霧や蜩舟

白梅や月光あびて尚白し

春の夢亡き父もゐて皆若し

あれこれと指先つかひ野に遊ぶ

肩の荷の翼となれよ春の風

誰かれへ不幸も馴ると囀れり

花吹雪より童顔の警備員

白木蓮や保育士に子を託す朝

極秘なる土筆立つ地へ孫をつれ

一丁目一番地より春来る

青木 朋子

織田 高暢

小島 翠波

石川 子熊

佐藤 和弘

むつみ 蓮

松井 順子

今井 康子

矢野 綾子

本多 トミ

青木 和男

立花 一枝

松尾 康代

空集作品評

柴田佐知子

鬪鶏の男の顔も鶏の顔

山本 則男

訃の報せ呆然と持つ蒨葎草

中田みなみ

岸洋子さんの訃報と思われる。一読知らせを受け
た時の衝撃の大きさが胸に響いて来る。手に持つ蒨
葎草がその衝撃の激しさをリアルに伝えてくる。

尾の先は雲に乗りたる鯉幟

高倉 和子

〈鯉幟〉と〈雲〉の取合せは多い。雲を蹴散らし
たとか、打ったなどが見られる。鯉幟が空を泳ぐの
だから当然だろう。しかし類句・類想を恐れていて
は俳句が細る。まずはチャレンジだ。和子さんは雲
の上に鯉幟の尾が重なった景を見逃さずへ尾の先は
雲に乗りたると軽やかに切り取っている。十七音
で表現する苦勞の跡は一切見えない作品である。言
葉の選択と組合せが巧みだから、さらりとした無理
のない句に仕上がるのである。

二十数年前に岸洋子さんが初めて見た鬪鶏の様子
を話してくれた。村の男たちが育てる軍鶏を持ちよ
り、荏で囲った土俵で闘わせるといふ。ひそかに行
われているようで余所者は警戒され立ち入ることは
難しいそうだ。羽根を散らし鋭い嘴と蹴爪で激しく
闘い、鶏冠が干切れたり、嘴が歪んだりする。鬪争
心の強い軍鶏が貌のまわりの羽根を逆立て跳び上が
り闘う。そして目の色をかえ勝負に熱狂する男たち。
これらすべてを、軍鶏と男の顔が同じだと言いつつ
たことで見事に表現している。

観音を背負ひて逃げし桃の花

吉田 菫

古来より建築物に木を用いている日本は、火事は
大敵である。戦乱の世に限らず多くの貴重な建築物
や神仏、襖絵などが炎の中に消えていった。この
観世音菩薩像にも炎が迫ったことがあったのだろ
う。へ背負ひて逃げしによって、村人達の決死の
姿が動画のように見えてくる。今は桃の花が咲く穏
やかな村に納まっている観音様である。

空集

柴田佐知子選

悼・岸洋子様四年前再会せしに

亀鳴くや言葉足らずに別れ来て

東京 中田みなみ

訃の報せ呆然と持つ蒨葎草

初七日や散らず萎えゆく花海裳

百の蝶生まれ噴き出す青菜畑

剥くごとに若きひかりの春キャベツ

赤子の首支へて遠き青嶺かな

空砲一発勢子ら山焼く火をおろす

北九州 深川 淑枝

山焼きの火に火重ぬる昏さかな

いつか吾をつつむ火音か大山大火

一途なる山火の色はさびしとも

丸焼けの兔残して山火消ゆ

末黒葦踏めば肋の折るる音

白雲を巻き込みながら野火走る

福岡 高倉 和子

若きまま父現るる春の夢

壁に身をすり寄せ通る恋の猫

竹林に鳥の羽音や仏生会

筍の囊をずらして出できたり

尾の先は雲に乗りたる鯉幟

鬪鶏の男の顔も鶏の顔

太宰府 山本 則男

白魚の渾身の跳ねありにけり

淡雪や手になじみたる飯茶碗

白といふ静けさにあり紋白蝶

芹摘むや水のひかりを払ひつつ

雛壇に余所見をしたき眼のありぬ

観音を背負ひて逃げし桃の花

粕屋 吉田 菫

雀の子大きく跳んだつもりかな

押さへてもまた跳ね上がる花筵